

《研究ノート》

現代社会を生きる生き方を考える（その1）
—理不尽な社会に抗して生き、若くして死んだ3人の作家の生き方とは—

内 田 司

要 旨

現在、経済のグローバル化にともなう経済的不均等発展によって、さまざまな社会問題が発生している。経済格差の拡大や雇用の不安定化などもそうした問題のひとつである。そうした状況は、生活者にとって極めて理不尽と感ぜられるようなこともあるのではないだろうか。それゆえ、生活者にとって、現代社会においてどのような生き方をしていけばよいのかという問いは、差し迫った問いとなっているように思われる。本稿は、現代社会における生き方に関する社会学的研究のための予備的考察を行うことを目的としている。その考察の手始めとして、現代社会と同じように極めて理不尽な状況があった戦前の日本社会に生きた、三人の作家の生き方を検討するとともに、その検討を踏まえ、生き方の社会学的研究の対象の明確化を試みたいと思う。

キーワード：理不尽な社会、個人化的生き方、自分たちの社会づくり

はじめに

生きるとはどういうことなのだろうか。生き方の社会学という立場で考えてみたいと思う。人間とは社会的動物であるということから見れば、それは、他者とどのような関係性をもとうとするのかということが大切であるように思われる。その関係性から見た生き方は、他者のために生きる、他者とともに生きる、他者には無関心に生きる、そして他者を犠牲にして生きるという4つに分けられるよう。

では、格差社会という現代社会のように富めるものと貧しいものと差が拡大し、生活苦に苛まれている貧しいもの、虐げられているもの、弱いものが増大しているような社会で生きるということはどういうことなのであろうか。そうした人たちのために生きる、そうした人たちを気にし、または避け、嫌悪し生きる、そうした人たちに無関心に生きる、そしてそうした人たちを犠牲にして生きるという4つの生き方に分類できるのではないだろうか。

複雑化した階級社会において生きる生き方についてはどうだろうか。権力にはむかって生きる、

権力とは無関係、無関心に生きる、権力から睨まれないように生きる、そして権力に迎合し、できれば一員となって生きようとするという、4つの生き方に分けられるように思われる。

最後に、自分の社会的成功や名声に関するこだわりの大きさと生き方との関係ではどうだろうか。社会的成功や名声に強いこだわりをもって生きるのか、それほどでもないのかということによって、生き方や生活意識も大きく変わってくると考えられよう。

以上の観点から私たちの生き方を分析することで現代社会における生き方の社会学的研究となるのではないだろうか。これから、この生き方の社会学的研究の一環として、ある意味で現代社会と共通する社会的性格を有していると考えられる社会状況の中で生きた、石川啄木、宮沢賢治、そして小林多喜二という戦前の3人の作家の生き方を考察していきたいと思う。しかし、本論は、それらの本格的な研究に着手することを目指そうというものではない。本論は、現代社会における生き方の社会学的研究のための研究課題の方向性を探り出すための研究ノートという位置づけのものである。

石川啄木、宮沢賢治、小林多喜二の生きた時代と社会

では、現代社会における生き方の研究を目指そうというのに、なぜ戦前の作家3人を取り上げて検討することから始めようというのだろうか。まずその意義を確認しておきたい。第一の理由は、現象している形は異なっているが社会的に排除され、抑圧されている人々を多く生み出しているという時代状況が共通していることである。戦前はいざしらず、現代社会で社会的に排除され、抑圧されているような人たちなど存在するのかと疑問に思う人もいるかもしれない。しかし、著者は、「ニート」や「フリーター」、そして「カフェ難民」と称されている人たちや、「貧困ビジネス」の犠牲になっている人たち、「ブラック企業」などで使い捨てのように働かされている人たちの中に、排除や抑圧というような社会事象が存在しているのではと考えている。

第二の理由は、作家や芸術家の人たちの中には、生きている時代と社会にたいする人並み外れた感受性をもち、それが彼らの作品と生き方に色濃く反映している人たちがいるのではないかと考えるからである。事実、本論で取り上げようとしている石川啄木、宮沢賢治、そして小林多喜二は、三者三様ではあるが、彼らが生きた時代と社会の中で、いいか悪いかということではなく、「はじめに」のところで述べた生き方の社会学的研究の視点から見たとき、常人にははるかに及びもつかない純粋で、象徴的な、著者の気持ちを込めた表現をするならば、凄まじいまでの生き方をした人たちだったのではないかとと思われるからである。

それゆえ、彼ら3人の作家の生き方を検討することで、現代社会を生きる生き方を社会学的に研究する研究課題を浮かびあがらせることができると著者は考えたのである。

次に、石川啄木、宮沢賢治、そして小林多喜二の3人の作家が生きた時代と社会の特質を考察しつつ、彼らの生き方研究の本論での検討課題を設定することにしてみたい。

石川啄木は、1886年2月生まれ、1912年4月死亡である。宮沢賢治は、1886年8月に生まれ、1933年9月に死去している。そして、小林多喜二は、1903年10月に生まれ、1933年2月にこの世を去っている。3人の作家たちは、19世紀末から20世紀初期の同時期に生きていたと言えるのではないだろうか。

この時代の日本はどのような特質をもっていたのだろうか。遅れて近代化の道に入った日本は、欧米列強の地球分割・植民地化競争というグローバル環境の下で、その歩みを進めなければならなかった。その道は、国内的に見れば、国内に周辺を形成し、急速に資本蓄積を進めていくものであった。そのため、大きな格差社会の中で、貧しいもの、虐げられていた人たちが数多く存在していた。都市では、無権利の半奴隷的労働が跋扈し、農村では、小作制度の下、厳しい生活を余儀なくされている多くの農民たちが存在していた。

政治的には、天皇制専制主義的国家体制の中で、国民の政治的自由、民主主義は抑圧されていたと言われている。しかし、一方で、資本主義の発展にともなって、民主主義を求める声や自由主義的な風潮も次第に台頭してきた時代でもあった。1910年代から20年代にかけて、政治、社会、そして文化の領域で、民主主義的、自由主義的運動、風潮、思潮が時代的潮流となっていたのである。これらの社会的動きは、大正デモクラシーと呼ばれている。また、社会主義的、無政府主義的運動や思潮も現れてきていた。

経済的に見れば、1914年のヨーロッパを戦場とする第一次世界大戦の勃発によって、日本の資本主義は大きな発展の機会をえることができた時代でもあった。戦争によりヨーロッパの列強が後退したアジア市場への進出など、日本は、大戦景気という空前の経済的好況を享受することができたのである。

しかし、1910年代以降の経済的好況と政治的自由主義謳歌の時代は、一時的なもので、急速に萎んでいくことになる。世界恐慌の兆しが見えてきた1920年代末以降になると日本は、経済的・政治的に暗いトンネルの中に突入していくことになる。

近代化と経済状況の悪化のもとで出現してくる労働争議・運動や小作争議・農民運動、そして民主主義的、自由主義的、社会主義的思想と政治的運動の取り締まりと抑圧・弾圧の動きと政治体制もより一層強さと厳しさを増大させていったのである。

1900年には、ストライキを禁止するなど当時勃興していた労働争議や運動、そして社会主義的政党を取り締まるために用いられた治安警察法が制定されている。1910年には、天皇暗殺計画をしたという罪で、幸徳秋水などの社会主義・無政府主義運動家を検挙・起訴し、うち12名の死刑執行をするという大弾圧が行われた。同時にこのとき、警視庁内に特別高等課という思想警察が設けられた。

世界史的に見れば、1917年にロシア革命が起これ、国内的には、1918年に人々の生活苦を背景とする米騒動という民衆運動が起きた。さらに、1922年には日本共産党が結成されている。1923年には、関東大震災が世情をより不安にしていた。こうしたなか、一方では、護憲運動

の興隆を受け25以上の男子に選挙権を認める普通選挙法が成立していくことになるが、同時に政府は、「国体」の変革や私有財産制度を否認する結社を取り締まり、処罰し、弾圧するための治安維持法を公布した。そして、この法律は、特別高等警察の「政治犯」と認定された人々に対する過酷な取り締まりが猛威をふるう状況を生み出していったのである。

こうした時代と社会状況の中、上記の3人の作家はどのような生き方をしたと言えるのだろうか。ここでは、3人の作家の生き方を、「はじめに」のところで述べた視点から、仮説的、そして簡潔に記述してみたい。

石川啄木の生き方とは、一言で言えば、自己の文学的才能とそれが社会から評価され、尊敬の念を持って受け入れられるはずであるということを感じた生き方であった。同時に、彼は、自己の欲求・欲望を充足することを可能な限り抑制し、我慢することなく、一途に追い求める生き方をしたように思える。持続可能な生活を維持するための生活力には乏しかった石川啄木は、それゆえ、自分を受け入れ、支援してくれる他者の存在が何よりも必要だったのではないだろうか。さらに、啄木は、他者から指示・命令され、束縛されることに耐えがたい人でもあった。自分を評価し、受け入れ、支援してくれている人であっても、おもねることなく、ぶつかったときは即座に袂を分かった。

宮沢賢治は、徹頭徹尾、そして究極的に、社会学的意味での愛に生きた人であった。社会学は、自分以外の他存在のもっているかけがいのない価値を認識・評価し、その価値の観点から行動することのできる人間の力を愛と考える。宮沢賢治の凄さは、同じ人間存在にだけでなく、鉱物などの無生物的存在にさえ、生きているという光輝く生命の息吹を感受する力をもっていたように思われることである。

そのことは、社会学的視点からみたとき、宮沢賢治の徹底した平等意識に現われていたように思われる。宮沢賢治は、単に地球上の人間の間だけに平等性を感じていただけではなかった。銀河宇宙の世界に存在するすべての存在に、相互に関連し支え合っている関係性とその平等性を感じていたのではないだろうか。

しかし、そうした賢治だからこそ、生きていくことに私たちには考えられないほど大きな苦悩を抱え込まざるをえなかったように思われる。宮沢賢治は、自己の幸福は、自分以外のすべての存在が幸福になるということに係っていると感じていた。だが、他方で、賢治は、自分を含め、この世の存在は他の存在を犠牲にしなければ生きていけないような現実があることを見取っていた。しかも、賢治が生きた時代と社会には、賢治の身近に貧しさで苦しんでいる多くの人たちの存在を否応なく目にしなければならなかった状況にあったのである。賢治にとって、彼らの救済なくして、自分の幸福はなかった。

賢治にとって、その苦悩は、さらに深刻だったにちがいない。自己の階級的位置から見て、自分の生活は彼らの犠牲の上に成り立っているのではないかと感じざるをえなかったのではないか。また、賢治は、自らが救済しようとした人たちから受け入れられていない、むしろ生まれ、

嫌われているのではないかと苦しんでいたのではないだろうか。宮沢賢治の生き方とは、そうした苦悩に満ちたおのれの魂の救済を求めつづけた生き方であったとすることができるように思える。

小林多喜二の生き方は理解しやすい。多喜二は自分が考える社会正義の実現のために、権力と闘いつづけた。最終的に、多喜二は、革命家として天皇制国家権力と闘い、虐殺され、生涯を閉じた。

彼の生き方で凄いと感じるのは、自己の社会的正義感を少しでも抑えたならば、エリートとしての人生を歩めたであろうに、その道を捨て、逮捕されたならリンチ・虐殺されるかもしれない道を、躊躇なく選び、実践していったことであった。多喜二は家族関係にも恵まれていた。権力にはむかうことさえしなければ、人がふつう考える幸せで、穏やかな人生がおくれたであろうに。

小林多喜二の作品も、革命家として生きた彼の生き方を直接表現している。それらの作品は、なぜ当時の日本社会とは自分の命をかけても変革されなければならなかったのか、そうした社会の中で自分はどうか生きていこうとするのかを描きつづけたものであった。

石川啄木は、ひたすら自己の社会的成功を求めて生きた。宮沢賢治は、ひたすら自己の魂の救済を追い求めて生きた。そして小林多喜二は、ひたすら自分の考える社会正義の実現を夢み、国家権力と闘いつづけて生きた。彼らの生き方は誰にでもまねできる生き方ではなかったのは確かなのではないだろうか。

以上のような石川啄木、宮沢賢治、そして小林多喜二の3人の作家の生き方に関する仮説的叙述の検証を行わなければならないであろう。繰り返しになるが、本論は本格的にその作業を行うものではない。本論においては、著者がなぜ上記のような仮説的叙述をしたのかを、先行する彼ら3人の作家研究と彼ら自身の作品等の記述を参照・例示することで満足することしたいと思う。

石川啄木、宮沢賢治、小林多喜二の生き方

石川啄木の生き方とは

啄木は、文学世界で成功を成し遂げようと踏み出した旅のはじめから、大きな困難を抱えていたといつてよい。その困難とは、貧しさからくる生活との闘いであった。啄木最初の詩集『あこがれ』発刊のため上京していた啄木が当時盛岡に住んできた家族のもとに戻ったとき、19才の若さで一家の大黒柱として生活上の責任をその双肩に負わなければならなかった。そのとき、啄木は、新婚の妻、両親、そして妹と同居していた。だが、「啄木には収入を得る手段」⁽¹⁾がなかったのである。

一方では、一家の生活費を稼いださなければならない、他方では文学の世界で世にでるため創作活動をしつづければならぬ。この二つの、条件によっては背反しかねない道を啄木はどのように歩いていったのであろうか。啄木は、果たして、それら二つの道を両立させることがで

きたのであろうか。

啄木が家族の生活のため人に雇われて働いたという経歴は以下の通りである。まず、啄木は1906年4月から、故郷浜民の尋常高等小学校の代用教員となった。そこでの勤めは長くつづかず、1年後には、同小学校を「校長排斥のストライキを扇動して辞表をだし」⁽²⁾去っている。1907年、啄木は、単身で移り住んだ函館で、「商工会議所の日給六十銭事務補助」⁽³⁾のアルバイトを経験している。そこは1ヶ月で解雇された。その直後、次に、弥生尋常小学校の代用教員の世話を受けている。このときも、「啄木が弥生小学校にいたのはこの年の六月十一日から九月十一日までの三か月」⁽⁴⁾の短期間であった。

この間に、啄木は、啄木を経済的に支えつづけた宮崎郁雨の世話によって函館日々新聞社に、「遊軍記者という条件」⁽⁵⁾で採用され、同年8月から筆をとっている。しかし、1週間もたたないうちに函館の大火に見舞われ、弥生小学校の代用教員も、函館日々新聞社の職も失うことになってしまった。

そのため、啄木は札幌に移り、中江兆民が主筆をつとめていた北門新報社で働くことになった。校正の仕事であった。しかし、札幌での生活はわずか14日でしかなかったという。そのとき創刊された小樽日報社へ移ったのである。ここでは、「新聞の紙面はほとんど啄木が一人で作って」⁽⁶⁾いた。そうした活躍の場をえたものの、啄木は、またしても2ヶ月もたたないうちに退社する。啄木の勤務態度をめぐって事務長とぶつかり暴力をふるわれたことが原因であった。職を失って迎えた1908年の新年は大変むづかしいものであったという。

退社した小樽日報社社長の口利きで釧路新聞社に入れることになり、啄木はその窮状を抜け出ることができたのである。初出社は、同年1月22日であった。ここでは、啄木は、「実質的な編集長として辣腕を振る」⁽⁷⁾ったという。しかし、このときもまた、たった3ヶ月で退社している。理由は、忘れがたく湧き上がってくる「東京での文学活動への野心」⁽⁸⁾を抑えきれなかったことによる。その野心を煽るように、「恩師、与謝野鉄幹の上京を促す手紙」⁽⁹⁾が届いていた。斯くして、同年4月末、啄木は上京の旅に出たのである。

上京後、啄木は小説の執筆活動に専念することができた。しかし、いくら書いても認められることなく、精神的にも追い詰められていったという。小説「鳥影」が毎日新聞に連載されることになり稿料をえることができたということもあったが、経済的にも厳しい生活を余儀なくされていった。そうした中、1909年に入り、朝日新聞社に校正係として採用され、同年3月1日に初出社している。そして、今回は、朝日新聞社との関係は啄木が死ぬまでつづくのである。ここで、関係がつづくことと表現したのは、1911年2月に「慢性腹膜炎」によって入院し、事実上働けなくなった後も、朝日新聞は、前借という形の給料を払いつづけ、啄木一家を支えていったことによる。

中村稔は、啄木と朝日新聞社とのその関係を次のように論じていた。「朝日新聞社はいかに啄木の病気が長引いても、給料の前借を認めているから、節子(啄木の妻)は給料日には必ず借りに出かける。毎月一日には朝日新聞社に出かけて給料、それも前借金をうけとってきている。休

みが長引いても、この状態は啄木の死まで続く。この厚意が佐藤真一（当時の朝日新聞編集長）の意思によることは間違いないが、啄木には同僚にも、見捨てておかない魅力があったのであろう」⁽⁴⁰⁾〔（ ）内は引用者による。以下、傍点による強調、よみがな、（ ）などは断りが無い場合は原文によるものとする。〕。

以上が、啄木の雇われて働いた経歴であるが、不運が重なったこともあり、長く勤め続けることもできず、家族の生活費をまかなえるほど稼いでいたとはとても言えない状況であったことが分かる。また、その間、稿料による収入がなかったわけではなかったが、やはりとても家族生活を支えるに足るものでなかったことも言うまでもない。では啄木は生活費をどのような形でえていたのであろうか。それは、多くの先行研究によって究明されているが、返す当てのない、そのほとんどが踏み倒しとなってしまった借金であった。それは啄木の人生を色濃く特質づけるものであり、それをどう評価するかをめぐって数多くの毀誉褒貶の議論が展開されてきたものであった。

しかし、より啄木が啄木であった所以を示すものは、そうしてえた収入を家族の生活苦を顧みることなく自分の心の慰めと満足のための遊興費として使い果たしてしまっていたということではなかったではなかろうか。この啄木の「飲酒溺色」を、長浜功は次のように論述していた。長浜は、釧路における啄木の芸者通いに関する日記の記述を引用したうえで、「生活の荒れ模様はご覧の通り、完全な乱心ぶりであった。もともと啄木は浪費癖が抜けきれないから、入ってくるカネは勿論、借金したカネもまたたく間に浪費してしまう。ともかくこれだけの生活をしていれば幾らカネがあっても足りるわけがない」⁽⁴¹⁾、一方、「小樽に置きざりにされた老母や節子と京子は啄木から……三月には一銭も送られて来なかったために、その悲惨さは目を覆わんばかりの状態に陥っていた」⁽⁴²⁾と論述していた。

東京上京後の啄木の「飲酒溺色」という乱心生活に関しては、同じく長浜は次のように論述していた。「釧路でもそうだったが、啄木は家族の苦勞を顧みることなく芸者と酒に溺れる日々を重ねた。東京では酒はそれほどではなかったが、今度は芸者どころか淫売相手にうつつをぬかす日々である」⁽⁴³⁾と。

文学世界での成功を目指しながら他方では「飲酒溺色」という乱心生活の日々を送っていた啄木の日々の生活というものをどのように理解したらよいだろうか。このことに関しては、すでに多くの考察と指摘がなされており著者の出る幕ではないものと思われるが、本稿では、生き方論との関係で、そうした生活態度に追い込んでいったものと考えられる啄木の心情に焦点を当てた検討を、簡単にだけ行っておくことにしたい。自分を天才と認識し、自己の成功を疑わなかった啄木は、現実には、自分が望むようには社会から受け入れられず、とくに常に経済的に追い詰められつづけるような生活の中の啄木の心情とは、次のようなものだったのではないだろうか。挫折感と孤独感、募り積もるみじめ感となさけなさ感と不平不満感、そして社会への敵意感というのがそれである。

啄木は、1906年、「岩手日報」に掲載した「古酒新酒」という一文の中で、それまでの自分の生きざまを次のように振り返っていた。「我れ生れてより孤負の性を持てり、されば何事にまれ人の言葉に従うといふことを知らず、たゞ一向に己の欲する道を行き、己の欲する所を行へり。独り学び、独り立ち、独り進み、独り闘ひ、而して又独り自らの心に裁断し、安住し、執着し、自矜す」⁽¹⁴⁾と。この啄木の独白によれば、心情的にみると、啄木の一生とは、孤立と孤独の一生であったように思われる。なぜそのような心情となつていったのであろうか。

1909年5月7日に起稿した「一握の砂」の中で、啄木はそのことに関して次のような自己分析を行っていた。啄木いわく、「一体私は人好きのする質だ。……友人にしようと思つた人に逃げられた例が無い」⁽¹⁵⁾。しかし、「少し経つと其経歴なり性格なりが分つて来る。殊にもその人の欠点が見え過ぎる位見える。そして他人の長所は一向自分の利得にならぬものだ。人に限らず、何事でもさうだが、分つて了へば興味が失くなる。倦きて来る。畢竟私には既う用の無いものになつて了ふ」⁽¹⁶⁾のであると。

また、次のようにも言う。人と交際しているときは、「親しい。困つて、困つて、為様のない時は相談もする、訴へもする。喜んで助けて呉れる。助けられる時も、私は別れる時の来るのを知つてゐる。恩返しをしようといふ心は人並に有つてゐるし、是非返さうとも思つてゐるが、貧乏な私にはそれが却々出来ないことも知つてゐる。やがて別れる時が来る。——さうして私は旅から旅とさまよつて来た」⁽¹⁷⁾と。

なんと啄木は心情的にみると、孤独な生涯をおくつたのであろうか。では、釧路や東京で自分の家族の悲惨な生活を顧みることなく、「飲酒溺色」の生活にのめり込んでいったことに関して、啄木はどのような自己弁護をしていたのであろうか。その言い分に耳を傾けてみたい。1908年4月22日付の大島経男宛の釧路の生活を振り返つた手紙の中で啄木はその言い訳を次のように叙述していた。啄木いわく、

私「盃を脚んで快を呼び、絃歌を聞いて天上の楽としたる事なきに非ず。然し乍ら、噫然し乍ら、いかに酔ひ候ふとも、我を忘るゝ事なきこそ痛ましくは候ひけれ。……云ふべからざる孤独の感、酒と共に苦く候ひき。銚子を控へて我をして乱酔するを許さゞりし一妓の情に、辛くも慰められたる事あり。又夢なき眠りを唯一つの望みとしたる夜あり。然し遂に、『感情の満足なき生活』には到底耐へ得べからざる事を、極度まで経験いたし候ひぬ。人は矢張昔から情の動物に候ひけり。一切が無くとも感情の満足さへあれば、心荒まず」⁽¹⁸⁾。

「人は感情の満足を、若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生は遂に天が下の浮浪漢なり。之を若き女に求めむには我が心老いたり。之を家庭に求めむには我が性あまりに我儘に過ぐ。而して之を趣味に求めむには、我が趣味あまりに自発的なり。所詮は之を自己自らに求むる外なきを悟り候ひぬ。

『創作的生活』(専念創作に従ふ生活)はかくて現在の私の最大なる希望、唯一の希望に候ひき」⁽¹⁹⁾と。以上の啄木の言い訳によれば、彼は、孤独感と創作的活動を断念せざるをえない生活の中で生

じる心の空洞化,すなわち「感情の満足なき生活」から生じる心の空洞化により「飲酒溺色」に走ったということになる。それをどのように評価したらよいか、現段階では著者にはできかねる。ただ言えることは、ここまでの簡単な考察だけでも、啄木の心情は確実に、エリッヒ・フロムの言う悪に染まっていったのではないかということである。それは、啄木が作品の中などに現われている死への誘惑と他者を殺したくなるという心情の吐露に象徴されているように思われる。フロムは、彼の著書、『悪について』の中で、「ネクロフィリア（バイオフィリア）、ナルチズムおよび母に対する共生的固着」⁽²⁰⁾の三つは、ときに「もっとも危険な形態では集合し、ついには『衰退の症候群』を形成する。すなわち、この症候群は悪の真髄をあらわしており、病理学的に重症であると同時に、最も悪性の破壊性と残忍性の根源でもある」⁽²¹⁾と述べていた。以下、著者がそうした推測をした、啄木の作品や彼が起稿した文章を見ておこう。

まず、『啄木全集 第一巻』に収録されているそうした推測につながる彼の作品のいくつかをあげておこう。

わが抱く思想はすべて	一度でも我に頭を下げさせし	死ぬことを
金なきに因するごとし	人みな死ねと	持葉をのむごとくにも我はおもへり
秋の風吹く	いのりてしこと	心いためば
愛犬の耳斬りてみぬ		
あはれこれも		
物に倦みたる心にかあらむ		

どんよりと曇れる空を見てみしに人を殺したくなりにはけるかな

次に、『啄木全集 第四巻』に掲載されている1910年に起稿された「暗い穴の中へ」という文の中から引用しておきたい。

啄木は書く、「何の変化の無い、縛られた、暗い穴の中に割膝をしてぎつしりと坐つてゐるやうな現実の生活に、……一人位は、何百人あるか何千人あるか知れぬ東京の運転手の中に、全く無目的に全速力を出して、前の車を二台も三台も轢潰し、終ひに自分も車台と共に粉微塵になって死ぬ男が、あつてもよいやうに思はれた」⁽²²⁾と。

この啄木の一文は、2008年東京秋葉原で起きた派遣労働者による自動車を使った無差別殺傷事件や、現在も世界中の起きているISなどの思想に影響を受けた若者たちによる無差別殺傷的テロを予言していたかのようである。そうした心情をもちながら、しかし実際には犯罪を実行するに至らなかったのは、啄木には、なお人生の中に希望を託すことのできる文学があり、家族、そして経済的にも惜しみなく啄木を支えつづけてくれた支援者がいたからであったと著者は考えたいと思う。

宮沢賢治の生き方とは

宮沢賢治は稀有の平等主義的感性をもって生きた人であった。その平等的感性は単に人間の間だけに及ぶものではなく、すべての生命存在にまで開かれているものであった。賢治は決して他人の悪口は言うひとではなかったといわれているが、1918年5月19日付の親友保阪嘉内あての手紙の中で人の悪口を表明している。

「(保阪さんの前でだけ人の悪口を云ふのを許して下さい。)酒をのみ、常に絶えず犠牲を求め、魚鳥が心尽しの犠牲のお櫓の前に不平に、これを命いのちとも思はずまずいのどうのと言ふ人たちを食はれるものが見てゐたら何と云ふでせうか。……私は前にさかなだったことがあって食はれたにちがひありません」⁽²³⁾と。

さらに賢治は、同じ手紙の中で、「三千大千世界山川草木虫魚禽獸」の「仏道成就」のためには、己の身を粉にしてもよいとの覚悟を表明していた。

「一切の生あるもの生なきものの始終を審に諦かに観察したら何か涙でないものがありませうや。……おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切つて輝くそらに飛びたつその道の開かれたこと、……身を粉にしても何でもない」⁽²⁴⁾と。

このような平等主義的感性をもった賢治は、彼が生きていた時代と社会をどのように認識し、生きていこうとしていたのであろうか。著者は、この点の検討を、主として1927年に創作された彼の『詩ノート』の中の作品を素材として進めていこうと思う。1927年は、銀行への取付騒ぎが起り、銀行の休業が相次いだ「金融恐慌」のあった年であった。さらにその後、1930には「世界恐慌」が起り、日本も「昭和恐慌」に突入していくことになる。これらの経済不況状況は、とりわけ東北農村地帯でははなはだしく、農家の困窮は極まり、欠食児童や娘の身売りなどが社会問題となっていたのである。

そうした社会状況に直面して自分はどうのように身を処していくかに関して、賢治は、1927年に2年先立つ1925年4月13日付の杉山芳松宛の手紙の中で「本統の百姓」をめざすことを宣言していた。それは、当時勤めていた花巻農学校の教師職をやめることを決意したことでもあった。賢治はいう、

「内地はいま非常な不景気です。今年の卒業生はもちろん古い人たちや大学あたりの人たちまでずるぶん困る人も多いやうです。……わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本統の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創つたりしたいと思ふのです」⁽²⁵⁾と。このとき、賢治を駆り立てたものとは、このままでは愛する故郷の社会と人々がより悲惨な惨状に直面せざるをえなくなるこの予感だったのではないだろうか。

同時に賢治はこのとき、「本統の百姓」になれば自分は死ぬことになるかもしれないということも覚悟していたのではないかと思われる。というのも、賢治は自分の体力は「本統の百姓」の

労働に耐えられるものではないことを認識していたからである。1919年7月と推察されている保阪嘉内宛ての手紙の中で、賢治は、「私ならば労働は少くとも普通の農業労働は私には耐え難いやうです」⁽²⁶⁾と打ち明けていたのである。

では、賢治はなぜ自分の死を予感しながらも「本統の百姓」になろうとしたのだろうか。第一の理由は、目の前で窮地に陥ろうとしている人々を賢治の感性は見捨てるようなことを許してくれなかったからであろう。賢治は、それまで培ってきた農業に関する知識や技術で救済しなければとの使命感に突き動かされたのではないだろうか。第二の理由は、厳しく過酷な労働に追われている人々に芸術や文学の楽しみや喜びを知ってもらい、賢治は農民が「もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい」⁽²⁷⁾と願ったからである。賢治は、すべての人が楽しく生きていくために芸術も文学も勤労と共に存在するものであったと考えていた。しかし、芸術も文学も職業芸術家・文学家のものとなり、勤労者には「ただ労働が、生存があるばかりである」⁽²⁸⁾。その結果、「芸術はいまわれわれを離れ然もわびしく墮落した」⁽²⁹⁾。「いまわれわれは新たに正しき道を行き われわれの美をば創らねばならぬ 芸術をもてあの灰色の労働を燃やせ ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある」⁽³⁰⁾のである。

第三の理由は、そしてそれが第二の理由ともかかわる最大の理由であるように思われるのであるが、賢治が生涯を通してもちづけていたと思われる「罪」の意識ではなかったろうか。賢治は、石川啄木の場合と異なり、自らは働かなくても生活費の心配をする必要のない社会的地位にあった。厳しい労働を免れているにもかかわらず、学問を修め、芸術や文学に親しむこともできた。しかも、賢治の意識の中では、そうしたお金は、厳しい労働に従事せざるをえない人々を犠牲にしてえられたものではないかと見えていた。賢治がもっていた平等主義的感性は、そうした自分が精神的に安寧であることを許してはくれなかったのだ。賢治はこの「罪」の意識をたびたび口にしていた。

盛岡高等農林学校地質学研究所に研究生として在学しつつ父親の店の「店頭にて、家業の質店と古着商を手伝」⁽³¹⁾っていたころ、先にも参照した1919年7月ころの手紙と推測されている保阪嘉内宛ての手紙の中で、賢治は次のような告白を行っていた。

「私の生活をよそから脉めたら実に静な怠けたものでせう。きまつた本をも読まず、きまつた考をも運ばず玉葉に虫が集れば構はず私の目が疲れてかすめば他人の目と感ずる。私はいまや無職、無宿、のならずもの、たとへおやぢを温泉へ出し私は店を守るとしても、岩手県平民の籍が私にあるとしても私は実はならずもの ごろつき きざし、ねぢけもの、うそつき、かたりの隊長 ごまのはひの兄弟分、前科無数犯 弱むしのいくぢなし、ずるもの わるもの 偽善者々長です。……監獄ももう遠くありません。いや私は今なぜ令状が来ないかを考へるのです。度々考へるのです。その来ないわけは心の罪は法律が問はず行の罪もないとは言へない」⁽³²⁾と。

さらに1932年6月19日付母木光宛の手紙の中で、賢治は、「何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐるので、目立つたことがあるといつても

反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて来てゐるのです」⁽³³⁾と自分の身を嘆いている。自分の父親と「賢治の祖母キンが義理の兄弟にあたる」⁽³⁴⁾関登久也も、賢治は「町の金持ちの息子や教師上がりに何が出来るかという批判的な目にあうのが、どんなに心苦しかったかしれません」⁽³⁵⁾と回顧していた。

いよいよ、ようやく、賢治の1927年創作の『詩ノート』の作品を参照する順になったように思う。引用にあたっては紙数の関係で一つの作品の一部となる。

「酒を呑みたいために尤らしい波瀾を起すやつも
じぶんだけで面白いことをしつくして
人生が砂っ原だなんていふにせ教師も
いつでもきよろきよろひとと自分とくらべるやつらも
そいつらみんなをびしゃびしゃに叩きつけて
その中から卑怯な鬼どもを追ひ払へ
それらをみんな魚や豚につかせてしまへ」⁽³⁶⁾

(1056 サキノハカといふ黒い花といっしょに)

この作品は、なぜ自分が教師でいつづけることができなかつたのかを宣言したものなのではないだろうか。

「……角だった石ころだらけの
いつばいにすぎなやよもぎの生えてしまった畑を
子供を生みながらまた前の子供のぼろ着物を綴り合せながら
また炊〔爨〕と村の義理首尾とをしながら
一家のあらゆる不満や慾望を負ひながら
わづかに粗澁な食と年中六時間の睡りをとりながら
これらの黒いかつぎした女の人たちが耕すのであります
……

この人たちはいったい
牢獄につながれたたくさんの革命家や
不遇に了へた多くの芸術家
これら近代的な英雄たちに
果たして比肩し得ぬものでございませうか」⁽³⁷⁾

(1063 これらは素朴なアイヌ風の木柵であります)

この作品にも賢治の平等主義的感性が如何なく示されている。同時に、賢治がめざしたものが、革命家でもなく、芸術家でもなく、貧しく、苦しい生活の中で、厳しい労働に黙々と従事しつづける「この人たち」であったことが表明されているように思われる。

「これからの本統の勉強はねえ

テニスをしながらか 商売の先生から
きまつた時間で習ふことではないんだよ
きみのようにさ
吹雪やわづかな仕事のひまで
泣きながら
からだに刻んで行く勉強が
あたらしい芽をぐんぐん噴いて
どこまで延びるかわからない
それがあたらしい時代の百姓全体の学問なんだ」⁽³⁸⁾

（1082 あすこの田はねえ）

賢治が目指した「本統の百姓」の学問論がこの作品のなかで語られている。

「……ちしばりの蔓……
もう働くな
働くことが却って卑怯なときもある
夜明けの雷雨が
おれの教へた稲をあちこち倒したために
こんなにあちこちちゃはたらいて
不安をまぎらさうとしてゐるのだ
……あゝけれども またあたらしく
西には黒い死の群像が浮きあがる
春には春には
それは明るい恋愛自身だったでないか……

さあ
帰ってすっかりぬれる支度をし
切できちと頭を（しほ）縄（しほ）って出て
青ざめて
こはばったたくさんの顔に
一人づつぶっつかって
火のついたやうにはげましてあるけ
穫れない分は辨償すると答へてあるけ
死んでとれる保険金をその人たちにぶっつけてあるけ」⁽³⁹⁾ （1087 「ちしばりの蔓」）

この作品には当時農民に対して行っていた稲作指導に臨む賢治の姿勢が表明されている。関登久也は、賢治のこの姿勢に関して次のように描いていた。賢治は、この時期、「稲作指導に寝食を忘れて没頭しましたが、一銭の報酬も受けず、しかもその指導に対する責任は、どこまでも忘

れませんでした」⁽⁴⁰⁾。「早害地帯では、人力の及ばない所もあって、それが天候不良に原因することが明瞭であるにもかかわらず、肥料設計を与えてなお収穫不良の農家には、損害賠償したり、^ち詫び酒二升を届けたりしたものです」⁽⁴¹⁾と。賢治という人間は一体全体なんという人間なのだ。

また、「本統の百姓」になるための日常生活も壮絶なものだったという。それは、食生活に典型的に現われていたようだ。関登はいう、「いよいよ農村の生活にとびこんだ賢治は、……栄養失調にもなりかねまじき、簡素な生活を始めました。貧農と変わらない日常生活を営みつつ、農民の向上をはかろうと、心に深く誓ったのでした」⁽⁴²⁾と。

また、関登は、「伊藤清氏から聞いた話」として、賢治の食生活ぶりを紹介していた。それによると、「宮沢先生の日常生活は、私達の間から見てもほとんど無理の連続としか思えませんでした。……その夕食がまた、極度に質素なもので、蕪(かぶ)などを土鍋でクツクツと煮て、その一品料理が夕食のお菜にされました。……先生の食生活は大よそこんな風であり、お菜のない時はトマトで夕食を間に合わせ、また冬、^{こお}凍ったご飯を三日も続けて食べたりするという具合で、はたから見ていても全く心配にたえないものがありました」⁽⁴³⁾。

そうした「本統の百姓」になるための壮絶な生活により命を懸けた賢治の「農民の向上」のための挑戦は、賢治自身が敗北を認めるような結果となっていった。それだけ、当時の東北農村のおかれた状況は悪化の道を辿らざるをえないほど厳しいものだったのである。1932年6月の宛先不明の手紙の下書きの中で、賢治は、そういう状況に対する自分の気持ちを次のように綴っていた。

「只今の県下の惨状が今年麦や稲がとれる位の処でどうかなるとは思はれません。まあかうなつては村も町も丈夫な人も病人も一日生きれば一日の幸と思ふより仕方ないやうに存じます。殊によれば順境の三十年五十年より身にしみた一日が重いやうにも存じます。それにしてもどうしてもこのまゝではいけないと思ひながら、敗残の私にはもう物を云ふ資格もありません」⁽⁴⁴⁾と。

「本統の百姓」になることを目指し、「農民の向上」のために挑んだ賢治の挑戦は、失敗に終わったと評価すべきものだったのだろうか。それは、否であるというのが著者の見解である。賢治の挑戦は、極限的な状況下で示された人間存在のすばらしさの歴史的事例として後世代の人々の心の中に永遠に刻み込まれ残るものであったろう。自己の魂の救済を求めての命がけの賢治の農民向上のための実践活動は、地域の文化的宝物として、賢治の故郷を照らしつづけていくに違いない。

註

- (1) 中村稔『石川啄木論』青土社、2017年、40頁。
- (2) 長浜功『石川啄木という生き方—二十六歳と二ヶ月の生涯—』社会評論社、2009年、78頁。
- (3) 同上、86頁。
- (4) 同上、89頁。
- (5) 同上、95頁。

- (6) 同上, 112頁。
- (7) 同上, 303頁。
- (8) 同上, 133頁。
- (9) 同上。
- (10) 中村稔, 前掲書, 300頁。
- (11) 長浜功, 前掲書, 128～129頁。
- (12) 同上, 129～130頁。
- (13) 同上, 173頁。
- (14) 金田一京助・土岐善磨・石川正雄・小田切秀雄・岩城之徳編集『啄木全集 第四卷』筑摩書房, 1974年(初版第八刷), 89頁。
- (15) 同上, 155頁。
- (16) 同上。
- (17) 同上, 155～156頁。
- (18) 平岡敏夫『石川啄木の手紙』大修館書店, 1996年, 157頁。
- (19) 同上, 158頁。
- (20) エーリッヒ・フロム『悪について』鈴木重吉訳, 紀伊国屋書店, 1987年(第29刷), 37頁。
- (21) 同上, 37～38頁。
- (22) 前掲, 『啄木全集 第四卷』, 275～276頁。
- (23) 新校本編集委員会編『新校本宮澤賢治全集 第十五卷』筑摩書房, 1995年, 69頁。
- (24) 同上, 70頁。
- (25) 同上, 226頁。
- (26) 同上, 173頁。
- (27) 同上第十三卷, 1997年, 9頁。
- (28) 同上, 10頁。
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 佐藤隆房『新版宮沢賢治—素顔のわが友—』富山房, 1994年, 322頁。
- (32) 前掲書『新校本宮澤賢治全集 第十五卷』, 172頁。
- (33) 同上, 406頁。
- (34) 関登久也『新装版宮沢賢治物語』学習研究社, 1996年(3刷), 奥付著者紹介。
- (35) 同上, 143頁。
- (36) 前掲書『新校本宮澤賢治全集 第四卷』, 1995年, 235頁。
- (37) 同上, 248～249頁。
- (38) 同上, 275頁。
- (39) 同上, 284～285頁。
- (40) 関登久也, 前掲書, 162頁。
- (41) 同上。
- (42) 同上, 355頁。
- (43) 同上, 355頁。
- (44) 前掲書『新校本宮澤賢治全集 第十五卷』, 409頁。

Thinking about Our Way of Life in Disparate between The Rich and The Poor and
Risk Society

—Considering Ways of 3 Literary Men Who lived against Unreasonable Japanese
Society and died in Young Ages before The Second World War—

UCHIDA Tsukasa

Abstract

A lot of social problems have arisen from unequal and unbalanced economic and social development under the globalization of modern capitalism. The problems of disparate between the rich and the poor, unstableness of employment, and so on are such problems. Nowadays more and more people in even affluent Japan are at least temporarily afflicted with poverty and unemployment. It seems that social exclusions are showing a tendency to increase. People must feel such economic and social conditions as unreasonable ones. So it is now urgently important for us to ask how we are to live in such unreasonable society. I would like to be engaged in sociological study on ways of lives in nowadays Japanese society. At first I try to consider ways of 3 literary men who lived against unreasonable society as like as nowadays Japanese society and died in young ages. In this study note I firstly try to consider ways of 2 literary men, ISHIKAWA Takuboku and MIYAZAWA Kenji.

Keywords: unreasonable society, individualization of our ways of lives, making our
own society

(うちだ つかさ 札幌学院大学人文学部教授 生活構造論)